

春夏秋冬 台湾徒然

第30回

生きている蒋介石

柳本通彦

フセインの銅像が倒されるシーンはまだ記憶に新しい。ちよつと振り返れば、東欧崩壊時のそれも忘れられない。しかし独裁者の運命はいずれも同じとは限らない。

台湾にもかかわらず独裁者が君臨していた。日本の敗戦以降、あるいは1949年、国共内戦に敗れてのち、台湾を支配した蒋介石である。字を中正という。蒋介石は、各級学校の校庭や役所の玄関など、ありとあらゆる場所に自らの銅像・胸像を設置させたばかりか、台湾中の市町村に中正路をつくり、その死後は、中正記念堂や中正国際空港を生んだ。おかげで中正路での待ち合わせは、往々にして待ちぼうけになる始末だ。

この間まで正式には「介寿館」（蒋介石の長寿を祝う意味）と呼ばれていたことを伝えると、たいいていの人は仰天する。台北を訪れる日本の学生によく質問される。「なんで、まだこんなものが残っているの？」なるほど……、外から見ればその通りなのであるが、実は、台湾総統府の建物そのものがついにこの間まで正式には「介寿館」（蒋介石の長寿を祝う意味）と呼ばれていたことを伝えると、たいいていの人は仰天

いう人物は、もともと台湾とも台湾人ともなんの縁もなかったのだから、とりあえず顔と名前を売る必要があったのである。

独裁体制は息子の蔣経国がつぎ、1988年の経国の死後ようやく自由の時代がやってきた。民主化が進み、96年には総統が住民の直接選挙で選ばれるようにもなった。しかし、その過程で、蒋介石の銅像が倒されることはついぞなかった。

「一筋縄でいかないということである。しかし、さすがに銅像は時代に合わなくなってきた。かといって、公然と倒すのはやはりはばかられるらしい。各学校や役所で、夜中にこっそり根元から切り取り始めたのが、03年前後からである。しかし切り取った方がいいが、置き場所に困る。何しろどでかい。



全島から集められた蒋介石の像は現在113体

トラックに載せられた蒋介石が集められたのが、台北の隣、桃園県の慈湖の空き地だった。実は慈湖には本物の蒋介石が「いる」。ご本人あるいは家族が、中国に帰りたいと台湾での埋葬を望まなかったため、火葬されることなく、当地に生身のまま眠っているのである。

慈湖には続々と蒋介石が集められ

てきた。軍服姿もある。普段着もある。笑っているのも、いかめしいものもある。馬に乗ったの、大きな椅子に座ったの、まさに百花繚乱。やがてうわさを聞きつけて、人が訪れるようになり、ついに観光名所になった。名付けて「蔣公彫塑記念公園」、樹木や花が植えられ、遊歩道がついて、駐車場には大型観光バスが往来するに至った。

今年度初頭、銅像の数、実に113体。なかには孫文や蔣経国まで混ざっている。これから続々やってくるであろう銅像のためにコンクリート製の台座もスタンバイしている。それどころか、最近になって、台湾中の軍事施設にある銅像にも撤去命令が出たという噂が流れ、物議をかもした。もしそれがほんとうなら、その数千体以上とも言われ、広い公園も、またたくうちに蒋介石父子で埋まってしまうことだろう。昨年は蒋介石逝去30周年にあたり、記念切手までが発行された。台湾の独裁者は、ますます意気軒昂である。

やなぎもと・みちのこ
京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」（現代書館）、「台湾革命」（集英社新書）、「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）